

45. キンモンホソガの寄生蜂に対する各種殺虫剤の影響

福島県果樹試験場病理昆虫部・平成11年度試験研究成績書

1 部門名 果樹－リンゴ－病害虫防除 04－01－23000000
2 担当者 岡崎一博・荒川昭弘・阿部憲義
3 要 旨

リンゴ用複合交信攪乱剤を利用した防除体系下に使用される主な補完防除薬剤がキンモンホソガの天敵寄生蜂に及ぼす影響を検討した。

(1) 当場内病理昆虫部リンゴほ場から第3世代幼虫のマインを採取し、マインを解体してヒメコバチの蛹を採集した。採集後に20℃、16L8D条件下の恒温室内で羽化させたヒメコバチ成虫(*Sympiesis*属)を供試した。濾紙(直径9cm)を入れた直径10cmのプラスチック製円筒型容器にヒメコバチ成虫(羽化1日齢)を閉じこめ、上部空気穴からピペットを用い、実用濃度の供試薬剤1mlを濾紙にしみこませた。対照区には水道水を用い、処理3日後までの死虫率を比較検討した。試験薬剤には、有機リン剤4剤、カーバメート剤3剤、硫酸ニコチンおよびMR、ジョーカーを供試した。

(2) ヒメコバチの成虫に対して、有機リン剤であるサイアノックス水和剤、スプラサイド水和剤、ダーズバン水和剤およびダイアジノン水和剤は強い影響が認められた。カーバメート剤ではオリオン水和剤が強い影響が認められ、硫酸ニコチンは一時的に強い影響があるものと考えられた。ミクロデナポン水和剤、ラービンフロアブルおよびMR、ジョーカーは有機リン剤ほどの強い影響は認められなかった。

(3) 以上の結果から、現在、モモンクイガやカイガラムシ類の補完防除剤として、サイアノックス水和剤やスプラサイド水和剤などを使用しているが、天敵保護の観点からIGR剤などへの移行を検討する必要がある。